

<特集>3年間
サッカー部
を支えた
選手達

人々を魅了してやまないドリブラー



深

井をはじめて見たときの衝撃は凄まじかった。大学サッカーに無知だった私は「大学にこんな選手

がいるのか」と驚愕してしまった。ピッチにいた選手の中で一番小さい選手がピッチを自由にドリブルし、観客を何度となくうならせる。その光景は鮮烈だった。

深井の醍醐味はなんとといってもドリブル。その原点は中学時代にさかのぼると言う。FCトラベツソというクラブチームに入団した深井は「個を伸ばす」というチーム方針によって才能を見出される。「あの

当時は僕の特徴を伸ばそうとしてドリブルしないでパスをだすと怒られてました。今じゃ考えられないですよ(笑)」。深井。高校は名門・葦崎高校に入学。中田英寿(フィオレンティーナ)とは入れ違いだったが多くのことを学んだと言う。そのなかでも一番印象的なのが3年のときの高校選手権。1回戦、滝川第二と当たり敗れるが深井は「あの時の負けがあるから今の自分がある。

FUKAI MASAKI

深井 正樹 (鹿島アントラーズ)
①1980年9月18日②161 釐・60 釐③葦崎高校—駒澤大学

駒澤大学時代

大学時代はそのドリブルでいくつものタイトルを総なめに。駒大に史上初のリーグ優勝ももたらした。北京ユニバの優勝メンバーでもある。



林文統(市原)というライバルも出来たし」と語る。その林が今はかつてのパートナー・巻誠一郎(駒大→市原)と市原でコンビを組んでいるとは何か運命めいたものを感じる。大学では1年からレギュラー。良きライバルであり最高のパートナーとなる巻とはこの時から2トップを組み始めた。2年からは10番の重圧やメンタルな面で苦しんだがその壁を乗り越え完全なチームのエースとなっていた。4年次にはリーグ初優勝をチームにもたらし巻と共に獲得した得点王を皮切りにMVPなど5部門を受賞し名実共に大学サッカーの顔となった。

大学時代、深井と巻で座談会をしてもらった。「2人で日本代表」「天皇杯でJチームから1点...いや2点とってやる」、夢を語る深井の目は輝いていた。「俺はそこまで」という巻に「ちいさくまとまっちゃうよ(笑)」という深井がとても印象的だった。そしてその輝きが今も衰えることはない。結果こそ思うようには出ていないがサポーターはもう深井のプレーに夢中である。カシマスタジアムが深井の笑顔

を、世界が深井の衝撃を待っている。

泥まみれのストライカー



泥

まみれになりながらもボールを最後まで追いつくという男。のが巻という男。がむしやらなま

でのプレー。しかし、内田潤(鹿島)は「昔はただ本当にがむしやらなだけだったけど足元も上手くなっていく」と大学4年生時の巻を評価。4年間パートナーを務めてきた深井(鹿島)も卒業前に「絶対に俺らの代で一番上手くなった選手」と巻を賞賛した。

巻が駒澤大学に入学した理由は「FWとしてプレーしたいから」。高校時代、巻はDFとFWの両方で起用されていた。しかし、そこにジレンマが存在した。FWでプレーしたいという自分の気持ちとは裏腹にDFとしての評価が高かったのである。スペインに遠征した時には対戦したチームから「DFとしてなら2億円プレーヤーにしてやる」と言われ高校にオフアアが届いたほどだ。しかし、それでも巻の心は揺るがなかった。監督に「FWをやるとなら大学に行け」と言われたとき迷

わず大学へ行く決心をした。熱心に誘ってくれた駒澤大学に入学。巻は「大学に入ってからは必死に点をとりました」と言う。必死になる理由はレギュラー争いの他にもあった。秋田監督からは「最終的にDFをやってくれ」と言われていたからである。「それじゃここに来た意味がない」と巻は必死に得点を積み重ね新人王を獲得するまでに成長する。その後は深井と共に2トップを組み駒大に数々のタイトルをもたらした。

MAKI SEIICHIRO

巻 誠一郎 (ジェフユナイテッド市原)
①1980年8月7日②184 釐・77 釐③大津高校—駒澤大学

駒澤大学時代

大学時代はそのドリブルでいくつものタイトルを総なめに。駒大に史上初のリーグ優勝ももたらした。北京ユニバの優勝メンバーでもある。



プロになった今でもこだわり続けたFWでプレー。前線で動き回る巻の姿は彼が理想と続ける「中山雅史」のようだ。「one for all, all for one」(自分はみんなのために、みんなは自分のために)、これが巻の原点でもある。そのためには泥まみれになるのが肋骨が折れようが足がつるうが戦い続ける。その姿は感動さえ覚える。彼がピッチに立つと自然と流れが変わることがある。試合後、彼の泥まみれのユニフォームをみてその理由がなんとなく分かった気がした。